〔翻　訳〕

ギルバート・バーネット　著
ロチェスター伯の生涯　(下)

生　田　省　悟　訳

（承前）

このようにして行なわれた我々の対話の成果は、ロチェスターによる次の言葉に集約されるだろう。即ち悪徳と不敬は解き放たれた野獣同様、人間社会にとって厄介なものだというのが分かったと彼は言ったのである。それ故彼は自らの生き方を完全に変え、正しく誠実であると同時に慎み深く、節度を弁えた人間であろうと堅く決意したのだった。また悪態を吐き捨てたり罰当たりな物言いをしたりするのを控え、ひたすら創り主を敬い、創り主に祈ることを目指してもいた。彼はキリスト教を完全に確信するに到ったというのではなかったが、己の才知を用いてそれを謗ったり、他人を堕落させるべきではないと考えていたのだ。

この点に関して、私は最晩年の彼と大いに話を交わしたさる貴人の言葉から一層の確信を得ることが出来た。ロチェスターはその人に向かって、仮に信仰が持てれば幸福になれるだろうし、また信仰から我が身を引き離そうなどとするつもりもないとしばしば語ったという。

ロチェスターの述べた意見に対して、悪しき性向を取り除かない限り、有徳なる生活は彼にとって誠に窮屈なもの、即ち永続的な束縛になってしまうだろうと私は答えておいた。或いは自らを変えるべき内なる原理がなければ、優れた生は達成し得ないものでもあろう。それは頻繁かつ熱心に祈り、自ら神に向かうことで初めて獲得出来るはずだからである。そして彼の精神が一旦悪徳に由来する放縦さから解放され、その病を癒すことが出来たなら、卓越した理解力に恵まれた彼は無神論や反宗教的態度を育む才知の飛翔なるものを悉く見抜くに違いない。そこには偽りの煌めきがあって、これが物事の奥まで見通す能力を備えていない弱視的な精神の持ち主を幻惑するのだ。だからこそ、こうした輩は無意味なことに固執するしかないのだろう。己を抑圧し、盲目にしていた事態から逃れたロチェスターの精神が直ちにその正体を見破れるほどのものに過ぎないというのに。

四月の初め頃にロンドンを離れた時、彼はこのような状態にあった。田舎に滞在してほどなく、彼は体調が非常に良さそうな気がしたので、サマセットシャにある自分の地所に早馬を使って出掛けることにした。ところが、この高揚した気分と激しい震動が原因で膀

胱の潰瘍が刺激を受け、強烈な痛みをもたらしてしまった。それでも必死の思いで、ウッドストック・パークのロッジへ馬車で戻ってきたという。[20] この時、彼の心身は共にひどく傷ついてしまったのである。彼には医術の心得があり、自身の体質や病状を理解してもいたので、潰瘍が破れて大量の膿が尿と共に排出された以上、回復の見込みは殆んどあるまいと判断するしかなかった。今こそ神の手が触れ、神罰が下ったのだ。彼が言うには、それは以前から感じていたような心に伸し掛かる漠然とした暗い憂鬱というだけでなく、非常に鋭く切り苛まれる想いがするほどの悲しみでもあった。それ故数週間も肉体の激しい痛みに苦しむことになったにも拘わらず、心の苦悶はそうした肉体における感覚を完全に飲み尽くしてしまうほどだった。彼は自身と大いに係わった人々に対して、この世の人生の後に来るものは何も無いけれど、ともかく罪の最中に知った快楽が束になったところで今心に感じている責苦とは匹敵すべくもないと伝えるよう、私に託したのである。彼は創り主をないがしろにし、侮辱したのみか、創り主に対して公然と挑んでしまったし、そうした不遜な行為に多くの人々を引き込んでしまったと考えていた。だからこそ、自らが永遠に呪われるという重大な危機に直面していると見ていたのだ。そこで彼は心から神に向かい、残された僅かな人生において能う限りのことを行なって、かくも邪悪な形で費された生涯の大半を贖おうとしたのだった。常時彼に仕えていた聖職者は彼の母の礼拝堂付牧師で有徳かつ善良なパーソンズ氏であって、この人は彼の指示に従って追悼の説教を行なってもいる。この説教には多くの注目すべき箇所があるのだが、今はそのことを指摘しておくだけに留め、読者に向かって逐一再現するのは控えておきたい。正しく善き人々に深い満足を与えてくれたこの説教を直接読むことで自らも啓発されたいという、我が読者の願いを害ねたりはしたくないからである。むしろ、ロチェスターから親しく聞いたこと以外は一通り述べておくだけにすべきだろう。病床に伏してしまうと、彼の許には毎週真に廉潔な高位聖職者たるオックスフォードの主教が訪れるようになった。この主教は六マイル離れたところに住んでいたのだが、頻繁に来訪するのを牧師としての自らの主要な務めだと考えていた。しかも控え目でいながら率直で、いかにも自然な態度で接し、一線を越えるほど馴れ馴れしい間柄になることなく彼と親密に交わろうとしたのだった。さらに、オックスフォードのリンカン学寮長で学殖溢れ、有徳なマーシャル博士は教区牧師でもあったので、彼もまたしばしばロチェスターと共に時を過ごしたりした。こうした人々の助けに支えられると同時に、一方で余りに表面的な悔悛で満足することのないよう、また他方で希望のまるでない悲しみに闇雲に圧迫されたりしないよう、彼は導かれたのだった。その彼が病床にあるものの、書簡を送っても差し支えない程度の状態にあると聞くとすぐ、私は能う限り心を籠めた内容のものを認めた。それを心から喜んで受け取ったと伝えるよう、彼は側に仕えている者に命じたという。けれどもそれだけで満足するどころか、彼は返書さえ送ってくれたのだった。彼の母のロチェスター伯夫人によると、これは一語一語彼が口述した上で署名したものである。以前の私はこれを公けにしたいなどとは思っていなかった。その中には私への過分な賞讃が含まれており、しかもそれは彼ほどの身分の人間

が書くにはふさわしからぬものだったからだ。とはいえ、当時の彼に訪れた心境の変化について彼自身が表わした想いを再考してみると、私個人に関する箇所を削除した上で公表すべきなのかもしれないと思うようになってしまった。

一六八〇年六月二十五日
ウッドストック・パークにて

親愛なるバーネット博士

私の気力と体力は共に等しく衰えておりますが、弱々しいながらも今、親しくお便りを差し上げたく存じます。私は、この世の中で誰にもまして聖職者の方々を高く評価するようになりました（中略）。また神の思召しによって後幾莫かこの世に留まることが叶うものでしたら、あなたとのお話し合いを通して敬虔な想いを高めていただけるのではと願わずにいられません。そうなることで、長い間愛してきたものに対して今どれほど嫌悪の情を抱いているか、また悔悛の念と神への奉仕とに如何に喜びを見出しているかを、世間に訴え得るのではないかと思うからです。来たるべき時に備えて私が真の悔悟と生の償いを示し得るためにも、神に（それが神の御意志なら）私への猶予を与えて下さるよう祈って欲しいものです。或いは今、私の生を終わらせたいと主がお考えなのでしたら、臨終の悔悛を慈悲深く受け容れて下さるよう、また主が喜んでなされた約束、即ち如何なる時であれ罪人が悔悛すれば、主は彼を受け容れて下さるという約束を遂行して下さるよう祈っていただきたいのです。親愛なる博士、何卒この祈りを全能なる神に捧げて下さいますよう、

忠実にして衰弱しつつある
あなたの僕ロチェスターのために[22]

後で面会した折に打ち明けてくれたように、訪れて欲しいという希望をそれとなく仄めかしたならば、私が実際に来るのではないかと彼は願っていたらしい。ただ、私がそれほど簡単に多くの時間を割けるものかどうか知らなかったので、彼はこの書面以上に単刀直入に述べるのを嫌ったのである。それに対して私は、彼があのような優れた人々の手に委ねられている時に、わざわざこちらから出向くのは図々しい限りだと思っていたと言っておいた。また、それまでの我々の自由な交際振りは事情を承知している人々には容赦してもらえただろうが、そうでない人々にとっては私の虚栄の現われそのものと映ったに違いなかった。それ故私としては、彼の書簡を受けるよりも以前に来訪するのは不都合なことだと考えていたのだった。そして容態の急変する危険もなさそうだと聞いていたので、七月二十日まで訪れるのを延ばしていたのである。彼の家に到着した時、ある些細な事件が起きてしまい、それをもとに誰かが話をでっち上げてしまったりした。実際は、フランス人の召使いが私の名前を誤って取次いだために、ロチェスターは治療を引き受けようと申し入れていた他人と勘違いしただけだったのだ。そのような人物とは係わり合いたくないと思っていた以上、彼はなかなか会ってくれ

はしなかった。この誤解は数時間続いたが、私はそれなりに満足していた。その時に私が側に待っていても、何一つ役に立てないほどの状態に彼は置かれていたからである。その夜が彼にとって最後の夜になりそうだとさえ思われたらしい。彼は痙攣の発作を起こし、喚き散らしていた。だが阿片が投与されて数時間休息した後には錯乱状態もすっかり鎮まり、二度とそのようなことは生じなかった。

目覚めた彼が傍らに控えている私を見付けた時の喜びようは容易には伝え難い。如何にも心の籠もった話し振りで彼は、私が遠路訪れたことの気遣いに謝意を述べ始めた。しかも、彼のような者のためにわざわざなどと、自身に対して忌わしい限りの言葉を用いたりしたのだけれど、そうした言葉はここに再現すべきではあるまい。彼の体力はひどく衰えていたので一度に長い話を続けるのは無理だったが、何とか力を振りしぼって途切れ途切れながら、過去の生に対する想いを話してくれた。或いはまた、創り主を大いに怒らせ、贖い主を汚した故に覚えざるを得ない懸念を始め、如何なる恐怖を経験したかとか、心がどれほど神や十字架に昇られた救い主を求めているかなどと述べさえした。彼は自身が真に悔い改めていると信じ、慈悲を得たいと切望していた。そして数週間に及んだ錯乱状態の果てに今、心は平静に包まれているというのである。彼は天に受け容れられることに強い確信を抱き、それについて一度かなり激しく感情を籠めて語った時さえあった。私に向かって興奮して話し掛けてきたのは、後にも先にもそれが唯一の機会だった。その際彼の精気は非常に衰え、消耗し切っており、以前の彼は祈る際にはより大いなる熱情を示したものだったのにと同囲の人々が洩らしたほどだった。彼の肉体的本性はそんなにも衰退し、精気は全く費えてしまっていたのである。だが彼は頻りに私も共に祈るよう求め、己の改心を完璧に定着したもの、確固たる晴れやかな清澄さに到達したものだと述べたりした。彼は臨終の床における悔悛について、私の意見を大いに聞きたがっていた。そこで私はその点に答える前に、彼自身の悔悛の状況と進展に関する詳細を教えてもらえたら好都合だと求めた。

そこで彼は多くを明らかにし、私を満足させてくれた。彼は今キリスト教の真理と内なる恩寵の力とを確信しており、次のような奇妙な説明を試みようとした。即ち、彼に罪を悟らせるべくパーソンズ氏が『イザヤ書』の五十三章を読んで聞かせ、それを我々の救い主が受難された経緯と比較しようとしたというのだ。そうすることで、イエス・キリストを冒瀆したユダヤ人が神の霊感を受けた書物として未だ手中に留めているこの預言書において、実際の受難の生じる遙か以前に既にその預言がなされているのを読み取れるのではという次第だろう。ロチェスターは私に、「耳を傾けていると、内なる力が訪れて来るのが感じられた。それは心を啓発し、確信を与えてくれたので、抗し難い想いがしてならなかった。言葉が権威を持ち、光線のように心に射し込んできたからである。だからこそ、その言葉を巡る推論によって確信を抱くに到り、理性を満足させ得たのみか、自身を固く拘束する或る力によっても得心がいったりしたのだった。その結果、以後は救い主の存在を強く信じ、雲に包まれたその姿さえ見えた想いがしたほどだった[23]」と話した。彼はその箇所を頻繁に読んでもらったので、空んじてしまっていた。そして私

との対話において、その多くの部分を一種天上的な喜びを抱きつつ取り上げ、それに関する自らの省察を披露することになった。その幾許かを私は覚えているが、例えば「我らが宣るところを信ぜしものは誰ぞや」（第一節）などがある。彼の語るところでは、「この箇所には福音書が自分自身のような悪人から受けるだろう反論が預言されている」という。また、「我らが見るべきうるはしき容なく、うつくしき貌はなく、我らがしたうべき艶色なし」（第二節）もある。これについては、「その人が如何にもみすぼらしい外見をしていたために、愚かで驕慢な人々はその人を見下した。彼らの喜びそうな道化服を着て来なかったからである」と彼は述べた。それ以外の箇所に関して彼が言ったことは良く思い出せないでいる。言うまでもなく私はその時の彼の話に大いに打たれ、対話の最中恍惚とし続けていたものだから、残念至極なことに細かな事柄まではなおのこと覚えていられなかったのだ。

彼の語ったところでは、そこで満足して秘蹟を受けたのだが、その満足感は夫人も共に秘蹟を受けてくれたことへの喜びで一層増加したという。彼女は何年間か誤ってローマ教会の宗教に引き込まれていたのだったけれど、彼も率直に認める通り、そうなるよう彼自身が少なからず加担していたのだ。そうした次第で、己の与っていた悪や災いが取り除かれるのを目撃した以上、これは病んでいる彼に訪れた最も喜ばしい出来事の一つとなった。さらに病気の間ずっと、夫人に向けて非常に優しく真心溢れる親切な態度を取ったので、以前犯したあらゆる罪の記憶は夫人の心から消え去り、併せて彼女から能う限りの誠意の籠もった看護を受けることさえ出来たのである。この種の讃辞は現在存命中の誰に対してよりも、気高い人柄の夫人に捧げるのがふさわしいはずだ。だが、とにかく私は話を故人だけに限定しなければなるまい。

ロチェスターは私に、世間に対する憤りを全て克服したと言った。それ故誰にも悪意を抱かず、たとえ個人的な理由があったにしても決して誰かを憎んだりはしないというのである。財産の全容は未だ確定してはいないものの、彼は負債の正確な額を提示し、賄える限り返済するよう命じた。そして自身に支払われるべきものを管財人に託しておけば、債権者も皆満足するだろうという自信もあった。彼は今、精神が以前とは異なるものの見方に捕われているのに気付いていた。彼は苦痛に苛まれても一切嘆いたりせず、たまたま私が居合わせた最中に非常に鋭い痛みの発作に襲われた時でさえ、「自分は喜んで黙従する」と言い、天を仰いで「神の聖なる思召しが為される以上、自分に何が為されようと神を祝福したい」とまで述べたのだった。或いは、神の御心のままに死のうと生きようといずれでも構いはしないと断言してもいた。その上、人間が己の生死を選択しようとするのは愚かなことに他ならないが、それでも出来得るならば死を望みたいとも洩らしたりした。彼は、生が快適なものに思えるほどには回復しそうもないことを充分承知していたのだ。死ねば幸福になれると堅く信じている一方で、生き続けると再び罪を犯すのではないかと恐れてもいた。そして私に「もし再び堕落したら、どのような状態に陥ってしまうのか」などと尋ねるのだった。さらに続けて、「もっとも神の恩寵と善とを信じているので、人生の行程や仲間が自分を陥れようとすることになるかもしれない誘惑を全て

回避するだけの覚悟は出来ている。しかも、以前の行跡がもたらした大きな醜聞をせめて身の処し方を改めることで取り除くため以外には、如何なる目的のためにも生き永らえたいとも思わない」と言ったりもした。私は折に触れてこうした話を彼から聞かされていたし、さらに加えて、死に直面している悔悛者に如何にもふさわしい内容の伝言をかつての仲間の幾人かに届けるよう依頼されたりもした。また、「己の生が神を大いに傷つけたのとは違って、己の死が何らかの善きこととなるよう祈りつつ」、他人を矯正する手段になり得るものは何でも公けにするようにとの責務すら託されたのだった。

このような事柄を全て聞かされて私自身納得がいった時、彼の来世について率直な意見を求められたので、私は次のように述べておいた。即ち福音書の約束は、その行なわれた不可欠の条件として心と生の真の変化に専ら依存しているはずだ。ただ現実の生活に具体的に現われてこない限り、心が本当に変化したか否かを確実に知ることは殆んど不可能だろう。また死にゆく人々の大半が示す悔悛は罪の意識からではなく、恩赦を乞い願う死刑囚の呻きにも似て、近づく死への恐怖から発せられるものであるからには、そうした悲嘆からは誰も多くを期待する訳にはいかない。然しながら、たとえ臨終の床であろうと罪人の心が真に生まれ変わって神に向かうならば、偉大な神の慈悲はその死に際の彼をも受け容れて下さるに違いない。以上の私の言葉に耳を傾けたロチェスターは「自分は完全に改心している。この心の覚醒を最初にもらしたのは恐怖だったのだが、ともかく今では揺ぎない信仰そして神への帰依となっている」と語った。

ところがこの立場に対しては、唯一つではあるものの、世人による偏見が存在していて、それがロチェスター自身のみならず他の善き人々に向けられた神の摂理の善き目的を覆そうと目論んでいるのだ。この偏見とは、上記の通りに考えることすら彼の病の一端であって、精気の衰退が原因で彼の内部で変化が生じ、以前の様子が消え失せただけなのだというものである。なかには彼が狂い死にしたと言う者さえいた。この類の風評は、凡そあらゆる点で途徹もなかった人物の最後の言葉や想いが、彼ら自身や他の輩に何らかの影響を及ぼすのを善しとしない連中が口に出すものに相違あるまい。だとしたら、良心をそれほど麻痺させ、普通見られる程度の罪や無信仰を遥かに凌いでいる輩が存在するのではないか、また彼らにとってはこのような証し即ち今は亡き人による証しでさえ悔悛に通ずるほどの意義すらないのではないかと懸念されてくる。ロチェスターが狂っているとか愚か者だなどというのは全くの事実無根に他ならず、万一彼の周囲の誰かがそう言い触らしたのなら、それは非礼の極みと見るべきだろう。また、それを信じ込むというのも全くもって道理をはずれた馬鹿正直というものだ。私の待った最初の夜にひどい発作を起こしたその後で熟睡が得られてからは、私が仕えている限り、彼は決して喚き散らしたりなどしなかった。それどころか思考や記憶、また物事や人物に関する省察において、体力が全く衰弱し切った人間にはこれまで見られなかったほどの明析さを所有していた。精気も消耗していたので長く話を続けることは出来なかったが、目覚めた後、一度は三〇分、またしばしば十五分もの間話をしたりしたものだった。そうした話は活気に満ち、注目すべき内容

を保っていて、あらゆる点で如何にも彼らしいものだった。彼は幾度となく子供、つまり現ロチェスター伯と三人の姉妹を呼びにやり、決して書き表わせないほどの情感を籠めて彼らに話し掛けたりした。一度彼は私に子供を見守っていてもらいたいと求め、「これほど多くの祝福を与えて下さった神は何と善き方であったろうか。それなのにこの私は無礼で恩知らずの犬同然に振舞ってしまった」と言ったこともあった。ある時彼は公事を始め多くの人々や物事について大いに語ったのだが、かつてと全く同じ明析な思考と表現を行なっていた。従って、肉体的衰弱と話をすぐに打ち切ること以外のどんな徴候によっても、以前の才と当時のそれとの間に何の相違も見出せはしなかった。

また心の平静さが顕著に感じられた点は、以前あれほど嵩じていたはずの悪癖がすっかり影を潜めてしまったことにある。その悪癖即ち罰当たりな言葉を吐く行為は、一旦とにかく激してしまうと僅か三分間だろうと制するのが全く不可能になるほどの代物だったはずだ。彼は前の冬にこの悪癖が卑しく品位に欠けていることに嫌悪を覚え、それを克服しようと大いに努めたと打ち明けてくれた。とはいえ彼が告白するには、その悪しき習いに圧倒されてしまっていたので、如何なる類の刺激を受けても自然に口をついて出る冒瀆的言辞を繰り返し発しないと、熱の籠もった話など決して出来ないのだという。けれども臨終を迎えつつある日々に自責の念に駆られたりすると、彼はその悪しき行為に大いに心を痛め、以後は絶えず徹底した注意を払ってそれを完全に抑制してしまった。だからこそ私が彼に仕えた最後の日、非常に鋭い痛みが頻繁に襲ってきた時であろうと、或いは病や苦痛に喘ぐ人間が突然周囲に向かって示すような不快の念に包まれた瞬間であろうと、私が居合わせていた限り、彼は決して罰当たりな言葉を喚き散らしたりなどしなかった。

一度彼は、ある人が自分の求めたものを速やかに持参するどころか愚図愚図ばかりしていると思い込んで、腹立ち紛れに幾分激した様子で「あの畜生野郎」と言った。そこですぐ私は、彼がそれほど言い廻しを改め、冒瀆的な言葉という悪習を完全に克服したのを知って嬉しいと告げ、ただ、つい以前の癖が戻って人を「畜生」呼ばわりしたことだけが品を欠いていたと指摘した。彼の答えは「悪魔の言葉はかつてあれほど親しかった故に、未だこの身から離れようとはしないのだ。私以上に堕落し、畜生呼ばわりされるべき者は他にあるまい」というものだった。そして謙虚に神の赦しを乞い願った上で、私にその人を呼んで欲しいと頼んできた。その人からも赦しを求めようとしたからである。だが当のその人は彼の言葉を聞いてもいないし、立腹のしようもないのだからその必要などないと私は言っておいた。

私が彼の許に待っていた四日間、彼の精神は上記のような状態を保っていた。同時にひどく衰弱していたので、回復の見込みは全くなかった。尿には多量の膿が混っていて、それを常に苦痛を覚えつつ排出するのだったが、彼は立派に耐え、不平や性急な泣き事を訴えたりはしなかった。尿道に結石がありはしないかと彼は考え、探してもらったものの、一つとして見付からなかった。肉体の実質は潰瘍が原因で枯涸し、残っているのは骨と皮だけだった。加えて殆ど仰向けに寝ていたので、ところどころ壊疽になりかけてさえいた。

だが以前にもこれと同様の、全く見込みのないと思われる状態に陥ったことがあったりもしていた。そうした事情から、密かに投与された阿片剤のもたらした甘美な夜の休息を存分に味わった朝、これを自然の尽力によるものだと思い込んで、回復への希望を多少は抱き始めたのだった。彼の話では全く快調そのもので、ただ極度の衰弱状態が苦しいだけなのだが、それでさえもいずれは消え失せるだろうというのである。そして残された生涯へ向けて立てた計画、即ち完全に隠遁し、厳格かつ勤勉に生きるつもりでいることなども披露してくれたりした。然しながら、そうした話はすぐに打ち切られるのだった。自分の状態が熟睡によって得られた効果の現われに過ぎず、実際は相変わらず絶望的な状況だというのを彼は敏感に嗅ぎ取ったのである。

私は金曜日に辞去するつもりでいたのに、彼は幾分感情的になって、その日は留まっていて欲しいと望んできた。もっとも、死期が間近に迫っているといった徴候は現われていなかった。その時仕えていた優秀な医師も、衰弱がひどいので、たとえ些細なことでもそれが原因で突然落命する場合があるかもしれないものの、そうでなかったなら数週間は持つだろうと言っていた。そこで、土曜の朝四時に私は立ち去ったのだ。七月二十四日のことだったけれど、敢えて暇乞いをしなかった。というのもその前日に彼が私と別れたくないという気持を強く表わしたため、私は即座に譲ってもう一日滞在するのに同意したのだったが、もしそうしなかったなら、彼を苦しめることになるのではないかと思われたりしていたからである。そうした次第で、堅苦しい挨拶など省略して密かに彼の許を去るのが良かろうと私は判断したのだった。数時間後に私を求めた際、既に出立した旨を聞くと、彼は如何にも困惑した様子で「友に見捨てられてしまったとは。間もなく私も終わりということか」と呟いたらしい。その後は亡くなるまでに一、二度しか話をしなかった。彼は全く静かに横たわっていて、一度は非常に敬虔な祈りを捧げているのが聞こえてきたりもしたようだった。そして月曜の朝二時頃、彼は息を引き取った。痙攣も起こさず、呻いたりするほどのこともなかったという。

〈結　語〉

このようにロチェスターは生き、三十三才の生涯の果てにこのように亡くなったのである。自然は大いなることを為し得る能力を彼に与えた。彼はさらに知識と観察によって単に同胞のうちのみならず、自らの生きた時代における最も偉大な人物の一員たる資格を獲得したのだった。私自身信じて已まないのだが、神がもし彼をより長く生かしておくのが好ましいと考えられたとすると、彼は彼を知る全ての人々の驚異かつ喜びとなったことだろう。けれども、無限に賢明でおられる神は彼にとって何がふさわしいか、この時代に然るべきものは何かを弁えておられるのだ。それというのも、神と宗教への意識を全てかなぐり捨てた連中など、ロチェスターが生き永らえ得たとしたら提示してくれたはずの戒めと悔悛といった驚嘆すべき祝福を受けるに値いしないからである。のみならず善き神は彼を憐れみ、彼の真摯な改悛を御覧になって、恐らくは脆い人間性に

とって余りに過酷な誘惑となるような状況に敢えて彼を留めたりはなさらなかったと考えたい。今彼は安息を得、遅ればせながら真実の悔悛の果実を賞味していることだろう。然しながら未だに罪と不敬な行為とに耽り続け、耳許で鳴っているはずのロチェスターや他からの警鐘に目覚めようともせずに日々を送っている連中は、神に見捨てられ、専ら頑なに不信心を重ねつつ、罪としての過酷な苦しみを味わうことになるに違いない。

そうした輩の側に立って生きてきたにも拘わらず、それに殉じて死ねなかった一箇の人間という、広く知れ渡った例がここにある。しかも我が国のリベルタン[24]の中で、彼ほど罪の密かな謎を理解し、罪に陥った人間を支えるものを逐一検討し、さらには悔悛に到るのに役立つべき外から与えられる手段を拒絶した者は他にはいなかった。だが神の手が己の内面に触れた時、彼は最早「刺ある策を蹴る」[25]ことなど出来ず、「その力強き手の下に身を低くした」のだった。そして祈りの際にしばしば述べていたように、「あれほど度々神を拒んだ者が今、神の慈悲と憐れみ以外に避難所を見出せなかった」のである。

私は能う限り穏便かつ細心にこの著述を行なってきた。この方針に従い切れなかった箇所が万一あったにしても、「神のために虚偽を述るや」[26]という『ヨブの記』の言葉を銘記しつつ、述べた事柄の真実性を厳密に守ってはいるはずだ。宗教はそれ自体力と証しとを備えていて、嘘や作り話で支えてもらう必要などありはしない。私はロチェスターの語った言葉を全て正しく書き記したと言うつもりはないものの、記憶の確かな場合だけは彼の述べた通りを伝えている。ともかくも、書き終えた途端に死ぬ宿命にあると知っていたとしたら、定めしそうしたであろうと思われるほどの真摯な態度でこれを書いてきたのである。私は冬に行なわれた対話の覚え書きを彼と別れた後でつけることをしないでしまった。従って彼に対する私の答えを記す段になると、幾つかの点に関しては、我々の自由な語らいにおいて実際に述べた以上に詳細かつ整然と披露しているかもしれない。また、彼が語ったこと全てについて行なったほどには、私自身が述べたことを洩れなく書き留め得たか否かは定かではない。もっとも、そういったことがあったにしても、殆どの実質的部分は結局は何ら変わりがないはずだ。

さらに訴えさせていただけるなら、この書物を手にする全ての人々に、全体を考慮して欲しい、そしてある部分だけを悪しき目的のために歪めて利用したりしないで欲しいと切に願うものである。人の心を探る神は、如何に私が誠実に書いているかを御存知のはずだ。けれども仮に誰かがこの著述に含まれているかも知れない毒を飲み干すばかりで、そうした悪しき原理に対して提示されている解毒剤を服用しなかったならばどうなるだろう。或いはこのロチェスターという偉大な人物がそうした連中のことを深刻に省みた時に抱いた想いを、彼ら自身が熟慮しなかったならばどうだろう。さらには、私の書き記した彼からの疑念や反駁を頼りに彼らが悪しき生において確信を得るばかりで、本書の他の部分による作用で啓発されることがなかったとしたらどうなるだろうか。不敬な行為に浸っている輩を助長しかねない類のことを述べてしまったのは大きな不幸と見做さなければならない。然しながら私の意図が真摯なものだっ

たという事実によって、私はこのささやかな努めを捧げた当のロチェスターからも赦してもらえるだろうことを疑ってはいない。

私は能う限りを尽くして、この気高い貴族から託されたことを言わば歴史家としての役割を担いつつ遂行したのである。次に、聖職者として幾許かを述べておきたい。これほど非凡な主題ならば否が応でも一篇の説教を作り上げておくべきところだろうか。もっともその主題自体が大声で訴え掛けてくるので、それでも目覚めない輩など恐らく、私の語り得るところを何一つとして考察しないはずだ。もし今日のリベルタンが、重大な事柄に関して賢明な人間ならば用いるはずのあの自由と公正さに基いて自分達の以前の生を検証するほどまでに真面目になり、放蕩三昧で得たものと他人及び自らにもたらした災いとの収支決算をしたならば、如何に狂気染みた取引きを行なってしまったが即座に分かるだろう。そうした連中が己に約束出来るのは精々、気晴らしや娯楽、快楽の類に過ぎない。だがそれを獲得するのに、如何に多くの悪を経験することだろうか。如何に多くの輩が力を費し、肉体にさまざまな病をもたらしたばかりか、そうした類のことを追求するよう、彼らの時代を陥れてしまったことか。しかも彼ら自身若くして老年期を招き入れるような真似をした挙句、殆どが悲惨な境遇のうちに暮らすことになるのだ。禁じられた快楽に身を委ねた者が蒙らなければならない忌しい病、そしてそれに劣らず忌しく厄介なその治療法は言うに及ばず、痛風や尿滴歴、或いは他の疾患が過去の愚行に対する厳しい報いに当たるのである。その上、多くの者が淫行の徴としてしばしば肉体的変形を招来しており、さらに嘆かわしいことに、その感染が無辜の不幸な子孫に受け継がれていく場合も極めて多い。彼らの子孫はかくも汚れた源に由来したばかりに、不行跡のもたらす苦しみを蒙らなければならないのだ。或いは、悪徳に浸り切っているこうした連中は不節制が原因で時間と精力を使い果たしてしまうものだから、本来ならそれらを傾けるべき職務が疎かになるし、肉欲につけ込まれたりして放縦な出費が嵩み、結局資産は湯水の如くに浪費されることになるのだ。そればかりか、紛糾した事態を回復すべき主要な手段たる信用面でもやはり辛い思いを味わなくてはならない。節度のない出費が原因で多くの卑しい小細工を弄したり、自らの約束や決断を頻繁に覆したりする余り、紳士や賢明な人物なら命より重んずることもある名誉や名声を喪失してしまったりしたと痛切に感じざるを得ないからである。精神という高貴な力においても打撃を受けるだろう。それは長年に亘る不埒な行状によって、限りなく堕落していくのだ。従って、最初の花が大いに見込みのある期待を抱かせたはずの少なからぬ人々が、その花をしぼませ、偉大で高潔な企てを行ない得ないどころか、全ての物事に対しても不能になってしまっている。彼らはひたすら豚同然に官能の汚泥の中でのたうつばかりで、精気は費えて精神は麻痺し、職務に就くことも全く適わず、考えることにさえ向かなくなってしまうのである。

これほど高価な代償を些細で野卑な楽しみや淫らな肉の歓びに支払わなければならないというのは類を見ない愚行に他ならず、余りにも多くの具体例が眼前になかったら信じられないことに違いない。こうした事態に対して我々はさらに、悪しき行跡が彼らの心にもたらす恐怖、またその恐怖から逃がれるための厄介な小細工と

いったものを付け加えなければならない。即ち彼らは絶えず酩酊し、興奮したり、己の行為を省みることを習慣的に放棄していたりするし、(これらが心を充分に鎮めてくれなかったら)必ずしも断然落ち着ける訳ではないにしても、少なくとも苦々しい想いを和らげてくれるかもしれない無神論的立場に逃げ込んだりするのだ。

仮に人類と人間社会との状況を考察した場合、こうした生を迹る輩に匹敵するほどの厄災があるだろうか。彼らはどこへ行こうと疫病そのものなのだ。信頼も得られず愛されもしないどころか、彼らはむしろ信頼を育むと同時に愛を引き寄せるはずの真理と善とを放擲してしまっている。悪しき行ないで他人を堕落させたり、取り返しのつかないほどの危害を加えたりさえもしている。彼らは大変な危険を冒し、多大な困難に身を曝してはいるが、それは自らの受けるべき永劫の罰を確実なものとするために能う限り尽くしていることに他ならない。これが全国民に如何なる影響をもたらしているかは明々白々である。自然、婚姻の絆、そして他のあらゆる関係が何と徹底的に断ち切られていることだろうか。また、彼らにとって美徳は一片の古臭い因襲的儀礼に過ぎず、宗教は臆病とまやかしの結果だという。即ち彼らは彼らなりに新らたな知的及び道徳的な原理体系の下で、この世界を改革しようと目論んでいる連中なのだ。けれども、彼らから僅かばかりの大胆で淫らな冗談を取り除いたとしたら、憎悪の念を伴う以外に自らを覚えていてもらえるような何を彼らは行ない、行なおうとしただろう。彼らは今日、嘲笑の的に他ならず、次代においては名前など朽ち果ててしまうはずである。今、彼らの眼の前には手本たるべき一箇の人物が存在している。その人は初め、他からもたらされた悪風に深く染まって堕落したのだったが、不幸にして自らそうした状態をより一層強烈なものに高めてしまったのだ。彼はまさしく秀でた人物であって、単に才知を弄ぶだけで終わってはいなかった。その点で、彼或いは他の人々から聞いたことを浅ましく繰り返すばかりで、不遜と嘲笑を武器に世間を見下し、恰も知恵を教授してやるといった風情の連中とは異なっていた。そういった連中は己が教わった地点より以上には一段たりとも思考の階梯を迹って行けはしないし、借り物の機知と他人真似に過ぎないユーモアを取り去るならば、取るに足らぬ最低の人間という真の姿を即座に曝け出すばかりだろう。

彼らに少しでも考えようとする気があり、実際に考えることが出来るのなら、私は切に願っているのだが、いくら彼ら自身の原理に則ったところで、宗教が全くのまやかしだなどとは断言し得ないという事実を是非考慮して欲しい。彼らが言い張っている事柄は全て、宗教を雍護すべく導入された論議の若干の弱体化を狙っているだけのものに過ぎないはずだ。その一方で彼らには、己の原理が真実だと言い得るほどの自信など全くないのである。それ故精々で宗教が真実でない可能性もあるかもしれないと言う以上に、彼らの名分を高く掲げられるはずもないだろう。にも拘わらず、依然として宗教が真実だという可能性はあるはずだし、あまつさえその蓋然性をも否定しようとする連中には恥辱のかけらも残ってはいないのだ。だとしたら、かくも無意味なことのために大きな危険を冒すとは、彼らは何という狂った連中だろうか。然しながらそうした彼ら自身、神や審判或いは来世が存在するかもしれないと密かに認めているこ

ともあり得る。それならば、これらの実在を信じ、これらに則って生き、健康や心の平静そして多くの真実なる喜びが有する無垢の味わいなどを長く享受し、美徳の育む高潔さや他から与えられる善意と友情とに恵まれている人間の場合を考えてみたい。そうした人が亡くなる時、今述べた神を始めとする事柄が誤解だったと判明したとしても、彼は自分の過誤を見ることなどなくて済むし、死後においても苦悩や不穏の生じることすらないだろう。だが逆にそれらが真実だとすると、この世でのささやかな務めが極めて過分に報われて、来世にあっては無限に幸福な想いに浸れるに違いない。その一方、リベルタンは死を免れないのを承知している以上、彼らにとって死という想いは常に憂鬱であり、それ程遠くないと分かり切っている事態への楽しい眺望などは得られないのである。死を巡って彼らの抱く最も苦痛の少ない想いは、それが消滅であり、存在の終わりだということになる。しかし、それに対しても彼らには確信が持てないのだ。ある内なる密かな囁き故に、好むと好まざるとに拘わらず彼らは来世を懸念するあまり、戦慄までも覚えたりする。見掛け倒しの才知も皮相な学問も、宗教に関して思い付く限りの弱点へ向けられた無能な攻撃も、この時、彼らを決して支えたりしてはくれない。こうした点全てに関して私は今、恐らく歴史上どこにも匹敵すべきものがないほどの生々しい具体例を提示しているのだ。

ここには生まれながらにして秀で、研鑽によって高められていながら、悪徳と無信仰故に大いに腐敗し、堕落した才知の持ち主がいる。時代の誉れと言われるべき人物の一人となるはずだったのに、その彼は笑い草に成り果ててしまったのだ。しかも自らの悔悛が間に入らなかったなら、この時代における最大の恥辱の仲間入りをしていたことだろう。悔い改めた彼はリベルタンの取るに足らぬ名分が有する些細な力を充分理解し、最初のうちはそれを軽蔑していたのだったけれど、後には忌み嫌うまでになった。彼はそうした名分の災いと狂気を見抜いていたのだ。だからこそ、彼は多くの人々の醜聞の種として生きたにも拘わらず、自らと出会った人々全てを啓発すべき存在として亡くなったのである。けれどもそうした人々の数は極く限られていたので、彼は自分が亡くなった後も語り掛けることが出来たならと願った。彼は自分自身に対して、そして罪に対して非難を浴びせられる原因となりかねないものさえ包み隠そうとなどしなかったし、それどころか専ら神と宗教とに讃美を捧げてばかりいた。従って、極悪の罪人として生きたにも拘わらず、最善の範たるべき悔悛者として亡くなったのである。

ここから予定説の深遠な秘密に関する論議を導き出そうとする者があったなら、それは虚しく滑稽な推論だと言わなければならない。或いは、自分が「選ばれし者」の数のうちに入るならば思いのままに生きていけるだろうとか、神の恩寵が時に己を厳しく拘束し、抗し難い力でもって働き掛けてくれるはずであるなどと勝手に判断するのも同様の事態に過ぎないだろう。聖パウロの場合、定められていたあの優れた務めに就くよう命令が下された時には驚嘆すべき手段が用いられたからといって、[27] 他人がそのような召命を期待して良いという保証はどこにもあるまい。それ故、仮に何らかの目覚ましい機会にそうした類の回心が訪れることがあるにしても、それがどの程度奇跡たる要件を欠いているのかなどといった点を私は詮索す

るつもりはない。ただ、同様の奇跡的な事態が自分達にも起こるだろうといった愚かな想いと期待に縋って、悪しき生に耽り続けるのは虚しいばかりか邪悪な空想とさえ呼ぶべきであろう。想像を絶するほどの方法で神に働き掛けてもらう者があるにせよ、普通は理性という能力に具体的に示すことで神の作用が為されるはずだ。そして我々が能う限り高めるよう努めるなら、この理性は神の恩寵の助けに与って、回心には絶対に有効なものとなるだろう。万一これを疎かにしたり悪用したりすると、我々は自分自身を神の慈悲をもたらすべき通常の手段の埒外に置くことになり、悔悛に対して為される奇跡を期待する謂れなどなくなってしまう。確かに、時としてこの奇跡が他人の覚醒を促す有効な警告として起こる場合はある。けれども我々がそうした神の恩寵の尋常でないほど強烈な作用に頼り、それを求めたりもしたりすると、これは宗教の企図全体を破壊する事態を招来してしまうことになるだろう。

己の過去を厳しく振り返り、悪しき生を放棄する決意を固めた人々に私は望んでおきたいことがある。即ち、ロチェスターが終には神の慈悲に恵まれるのだという件に関してこの私も希望を抱いていると述べたからといって、自分達も罪を最早犯さなくなる状態まで悔悛を延期しておこうなどといった闇雲で理屈に合わない決心をする気になってもらっては困るということ、そして、自分達もやはり臨終の床で神に向かえば受け容れてもらえるはずだなどと思い込まないで欲しいということである。そうした人々の言い分では、臨終以前に真の意味で心が動かされたことのない者に対してさえ、如何なる慈悲であろうと神はそれをお示しになるというのだろう。然しながら神と己の魂とに不誠実この上ない態度で接し、計算ずくで神に赴くのを延期しようと謀る輩など、臨終の床で神の許に受け容れられると考えるべき謂れはどこにもない。突然死や理性を混乱させる類の病による死などに妨げられ、過去の生を省察する余裕が許されもしない場合すらあるだろう。我々の精神の内なる帰依は我々自身の思い通りになることなどなく、恩寵という助けなしには実現し得ない。しかも生涯、その助けを無視してきた人間にとって、死に際になるとそれが格別の形でもたらされるはずだなどと期待する謂れも全くない。また、進行が殊に急で生命に係わる病に苦しむ人間は悔悛を完璧なものにするのに不可欠なこと、即ち過去を振り返ることなど出来ないだろう。これを行なう機会が大いにあるはずの長期に亘る病気の場合でさえ、悔悛が誠実な信念からではなく単に恐怖から始められ、続けられたのではないかと疑うべき理由が多々見られるものだ。この点に関し、私としては、尽きるべくもない神の慈悲を制限してしまおうなどと目論んでいるつもりは全くない。ただ、これだけは告白しておく必要があるのだが、計算ずくで悔悛の時期を遅らせるのは、我々の最も重大な問題を恐らくは最も危険かつ絶望的なものに委ねることに他なるまい。

とはいえ未だ罪のうちに生き続け、罪に肩入れする余り、罪の強力な支配を振りほどくのに神の摂理が眼前に提示してくれていることさえ悪用したりして、とにかくあらゆる努力を払って悪しき行状に耽る自らを鼓舞するような輩——彼らに対して一体何を言うべきだろうか。彼らが頑なに己の立場に執着するならば、「もし我らの福音おおわれ居らば、亡ぶる者に覆われおるなり、この世の神は此等

の不信者の心を暗まして神の像なるキリストの栄光の福音の光を照らさざらしめたり」[28]といった呪いに徐々に陥るのではないかと懸念されてならないのである。

註

(21) 一六七四年以来、ロチェスターはウッドストック・パーク御料林監守の職にあったため、しばしばその地で時を過ごすことになった。

(22) バーネットの説明には一貫性の欠けているきらいも多少はあるが、〈序〉において言及されていた書簡がこれに当たる。なお、*The Letters of John Wilmot, Earl of Rochester*, ed. Jeremy Treglown (London: Basil Blackwell, 1980), p. 244 によれば、省略された部分には「しかも私の知る聖職者で、とりわけあなたを」といった文章が含まれている。

(23) バーネットはこれまでロチェスターの語った言葉を間接話法に則って書いてきたが、ここからはそれをイタリックで表現することになる。さらに、場合によっては直接話法にも頼っている。

(24) 原文では Libertines となっているが、適当な訳語が思い浮ばないので、已むを得ず通常行なわれているフランス語表記に従った。

(25) 『使徒行伝』九・五、二六・一四を踏まえた表現。この辺りは後段でも触れられる「パウロの回心」を意識した記述になっているようだ。

(26) 『ヨブ記』一三・七を踏まえた表現。

(27) 言うまでもなく、あの「パウロの回心」への言及である。

(28) 『コリント後書』四・三―四。

＊ 聖書から引用された部分の日本語訳については、原則として『舊新聖書』（日本聖書協会）に従っている。

（訳出に当たって）

いささか不謹慎と思われかねない言い方を敢えてしてみるなら、「稀代の放蕩貴族、熱血牧師と対決――信仰と無信仰の狭間で」といったところだろうか。一六八〇年ロチェスターの死後ほどなくして公けにされて以来、百年余りを経た十八世紀末に到るまでの間、本書は度々版を重ねたという。宮廷を中心とした上流社会が極めて放縦な雰囲気に浸り切っていたとされる王政復古期にあって、時代の寵児或いは半ば伝説的存在と目されていたのがロチェスターなら、そうした風潮の孕む悪徳を批判して已まなかったのが気鋭の聖職者バーネットだった。そのような全く相容れない立場にあるはずの二人が行なった対話の記録は確かに注目すべきものだったろう。人々が興味を覚えざるを得なかった経緯を想像してみることはそれほど厄介な話でもあるまい。

ギルバート・バーネットは一六四三年、エディンバラに生まれた。進歩派の弁護士だった父からは高潔にして寛容を尊ぶという気質を受け継いだと言われるが、これこそが生涯に亘って彼を特徴づける要因となったのである。アバディーンのマリシャル学寮を卒業後は神学の研鑽を積む傍ら、オランダやフランスに渡航したばかりかロンドンにもしばしば出向き、設立直後の王立学士院の会員にもなったりしている。一六六七年、ハディントンの牧師に就任して以来、その職務において人望を集めると同時に国教会の抱える諸問題や抗争に強い関心を示し、若さ溢れる批判精神を大いに発揮したという。この頃既に国王や廷臣達の知己を得ていたらしく、一六七二年には

チャールズ二世の礼拝堂付牧師の一人に任命されている。だが、国王の不品行を非難したことが原因で不興を買い、二年後にはその職を解かれてしまう。その後は目立った公職に就くことなく、専ら例の「旧教徒陰謀事件」を始め、国政や教会を巡る諸問題に度々論陣を張ったりしていたようだ。チャールズの息子ジェームズが即位した後は不自由さの度合いが増したために海外へ逃れ、各地を転々とした挙句にハーグのオレンジ公ウイリアムの庇護を得ることになった。そうした経緯から名誉革命にも係わりを持つに到り、その後は一六八九年にソールズベリの主教に任じられるなど数々の栄誉に与かっている。それでもなお己の信ずるところに従い続け、良心の自由を尊重する立場から公事や国教会の方針を巡ってたびたび発言を繰り返したという。亡くなったのは一七一五年、波瀾万丈とまでは言えないにしても、絶えず積極的に行動して已まない一生だった。また論文や著作の類も多数遺しているが、本書を始め既に紹介済みの『英国宗教改革史』、或いは一七二三年と三四年に刊行された『同時代史』（*History of My Own Time*）などが代表作と見做されている。

一六七九年秋、健康を害ねてしまっていたロチェスターがバーネットとの面会と語らいを求めてきた事情は〈序〉において述べられている通りである。彼ら二人の間で交わされた会話は文字通り腹蔵なきと言い得るものだったに違いない。それにしても、ロチェスターの口から出た一言一言に対して延々と向けられる反論のありようはどうだろう。まさしく信念の人にこそふさわしい使命感を湛えたその口調は、徹頭徹尾ロチェスターを説得することに全精力を傾けていた事実を正確に伝えてくれている。正論に過ぎるほどの所説を自信たっぷりに披露する聖職者バーネットは、間違いなく健全な良識の持ち主だった（当時であればなおさら、それであり続けるのはどれほど困難な生き方だったろうか）。

然しながら、能う限りの論法を駆使してバーネットが己の信念を開陳すればそれだけ一層、短い言葉で洩らされるだけにロチェスターの抱いていた懐疑の根深さ、執様さが却って浮き彫りにされてきてしまう。バーネットの饒舌さはむしろ、そうしたロチェスターの態度のもたらす衝撃を食い止めようとする、言わば常識の側が行なう必死の防御作用ではなかったか。この皮肉な視点が許容されるならば、本書は明々白々であったはずの意図――放蕩貴族における悔悛の顚末とその社会的・道徳的意義――から大きくはみ出してしまったとも言えるはずだ。

ロチェスターの改心＝回心が本書で記された通りの事実だったのか否かといった問題は扨措くにしても、彼の科白からは、あらゆる面に及ぶ価値の相対化という状況に曝され、かつそれを生きなければならなかった一個の人間の姿が如実に現われてきている。生や死、そして神といった人間にとっての根幹を見据えた際に覚えずにはいられなかった心の揺れ動き、絶望的な懐疑が何の虚飾もなしに提示されているのだ。その意味からも、本書は世の手本たるべき個人の記録だけに留まってはいない。むしろ鋭い知性と感性を備えたロチェスターを通して、表層では浮れ狂っていたはずの王政復古期という時代の最深部に巣喰っていた「あるもの」の一端に繋がってしまったのである。十七世紀精神史にまつわる優れた資料と認めるべ

き所以でもあろう。